

冬の寒空を見上げると、満天の星に驚くことがある。ピンと張りつめた冷たい空気のその向こうで、輝き、溢れだす星たち。人は、神話の時代から、はるか彼方で輝く星に思いを馳せていた。

熊本市武蔵ヶ丘の井手和義さん(41)も星に魅せられたひとりだ。中学生の時凶鑑を見た、美しい星雲の写真が忘れられない。「いつか、僕もあんな写真を撮ってみせるぞ。」父に買ってもらった小さな望遠鏡で、遠い星をのぞいては、心を震わせたものだった。

それから26年が過ぎ、眠ることのない街のネオンが天体観測の支障となった。井手さんは望遠鏡を車に積み、天



体観測のメッカである九重や阿蘇の高原へ足を運ぶようになる。中でも、お気に入りのは産山村だった。『阿蘇大神降誕の地』と言われているだけあって、神秘的な雰囲気があり、街の灯もここまでは届かない。天体観測には絶好の場所だ。

「駄目でもともと、仲間4人で思い切って役場に出向いたんです。産山村に天文台を作らせてください、と。したら、米年完成するヒゴタイの公園の一角を、無償で貸してもらえることになって……。」

喜んだ4人は、さっそく天文台を建てる準備に取りかかった。グループ名はオリオン座の大星雲に輝く四重星になつて……。」

# 星空の彼方に、僕の夢がある。

井手和義さん



あやかつて、『トラベジウム』。今年7月に完成したばかりの天文台は口径25センチの望遠鏡を備え、屋根をスライドさせれば、すばらしい星空が頭上に広がる。

「来年の夏には、すぐそこに村営キャンプ場ができるんです。望遠鏡をのぞきたいという方には、喜んでお見せするつもりです。特に子どもたちには見てもらいたいですね。星に興味を持ってくれたら嬉しいです。」

ここで、少年時代の夢そのままに、たくさんの天体写真を撮った。

「肉眼では見えないアンドロメダ星雲や馬頭星雲などを撮ったんですよ。今、楽しみにしているのは、ホイジャ12号です。惑星の最新事実を次々に伝えてくれるでしょう。来年は海王星に接近するんですよ。毎日、星を見ていると、もしかしたら新しい星が見つかるかもしれないな、なんて……。」

無限の宇宙に、井手さんの夢は果てしなく広がっていく。星が願いを叶えてくれるというお話しも、あながちウソでもないのかなと思えてくる。

